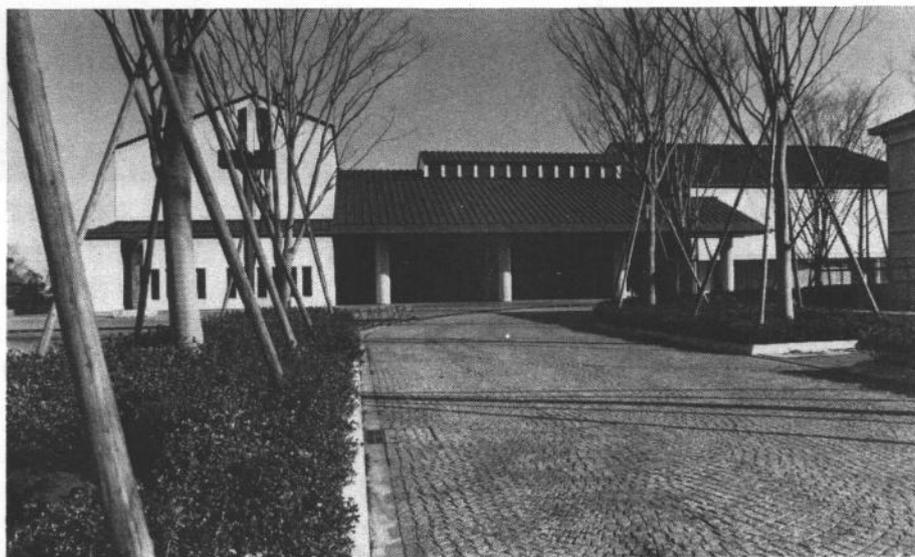


府中市郷土の森がオープン

昭和54年、市制25周年の記念事業としてスタートして以来一部をのぞいて、「郷土の森」が4月4日から一般公開されます。

13万平方メートルの広大な敷地に、管理棟をかねる博物館本館を中心として、移築古民家や2000本の梅が植えられる梅園、芝生広場などからなる多目的公園が広がっています。

◎**府中市博物館** 自然・考古・歴史・民俗の四分野からなる常設展示は、豊富な実物資料の他、多彩な模型や映像を通じて府中の概略を知らせます。参考資料室や体験学習室も利用できます。



“情報の蔵” 府中市博物館

◎**移築古民家など** (計画中のものも含む) 7棟の建造物が「郷土の森」の中に、配置されます。①旧府中町立府中尋常高等小学校 ②旧府中町役場庁舎 ③旧島田家住宅 ④旧河内家住宅 ⑤旧越智家住宅 ⑥旧田中家住宅 ⑦旧府中郵便取扱所

◎**プラネタリウム** 直径23メートルのドームには、1万2千個の星や惑星、多彩な映像群、全天周映画(アストロビジョン)が迫力ある音響とともに投影されます。このプラネタリウムは、日本最大級の規模です。

◎**交通** (バス) 府中駅・府中本町駅・分倍河原駅から健康センター行「郷土の森」下車

◎**利用料金** 入園料 大人50円 子供30円 博物館入館料 大人200円 子供100円 プラネタリウム観覧料 大人500円 子供250円 なお、博物館券またはプラネタリウム券を求めると、入園料は無料となります。

◎**休園日** 毎週月曜日と年末年始 ただし月曜日が祝日に当たるときにはその翌日

◎**開園時間** 午前9時から午後5時まで、ただし入園は午後4時まで

◎**所在地** 東京都府中市南町6-32
電話 0423-68-7921

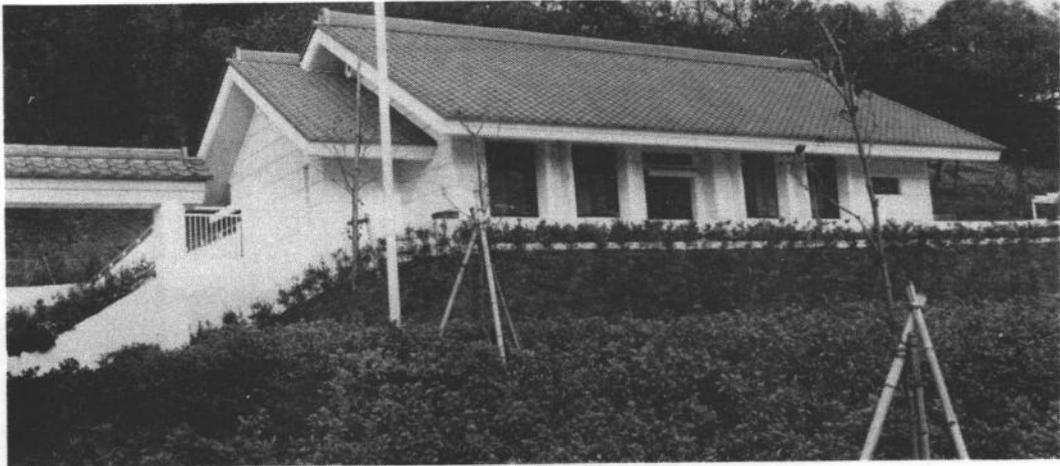


上空から見た郷土の森

自由民権資料館誕生とその目指すもの

新井勝紘

自由民権運動というのは、今から100年ほど前の明治10年代（1880年代）、民主主義の実現を求める運動として、全国の農山漁村の草の根にまでひろがった日本で最初の国民的な運動でしたが、その中でも最も活



発に展開した地域が神奈川県である。三多摩地域は明治26年までその神奈川に属していたが、とくに八王子や町田を中心とした南多摩は、多くの民権家を輩出し、また武相国民党事件などにも中心的役割をはたした。

独立した新築館として全国ではじめて町田に建設された自由民権資料館は、民権運動の拠点地であったという歴史的背景があるが、1980年代前半、自由民権を現代的視点からとらえ直そうと展開された、民権100年を記念する全国的な運動が下地になっている。町田市でもいくつかの集會がもたれ、「自由民権の碑」の建碑運動などが市民サイドで盛りあがった。民権家のご子孫から民権結社「凌霄館」跡地の寄贈をうけたことが直接的な動機となったが、三多摩の近代史の中でも正と負の両側面できざまな歴史的遺産を残した民権運動を、正しく評価し、そこから何か学びとろうと意欲的な学習運動を実践した市民の幅広い活動の蓄積が、行政側をこの資料館建設につき動かした力となっ

ている。その意味でも全国から注目されている。

建物自体は150㎡とごく小さなミニ資料館ではあるが、展示・閲覧コーナー、収蔵庫などを備え、白壁の土蔵をイメージした建物が、民権の森を背にして石坂昌孝・村野常右衛門を生みだした野津田の里を一眺にできる高台に建っている。入口には凌霄館跡地を記念した碑も建てられ、広い敷地は一面、ツツジが植えられ、開花が待たれる。休館は月曜日で、入館料は無料。

開館記念特別展は「草の根の自由民権展」を開催し、1ヶ月余の間に2300名以上の見学を数えた。年数回特別展を企画し、ふだんは常設展示となっている。これらの展示に加え、自由民権運動研究の文献センター的な役割をはたすことも主要な目的とし、民権家ご子孫の協力を得て直接の関係史料（古文書）を収集・保管・整理・公開し、論文や研究書、関連書籍、写真なども追々に収集していく予定である。町田市という狭い枠にとらわれないテーマと活動を目指していきたい。

町田市立国際版画美術館開館にあたって

町田市立国際版画美術館普及係 今井圭介

町田市立国際版画美術館は横浜線・小田急線・町田駅より歩いておおよそ15～16分、武蔵野の面影を残す緑濃い芹ヶ谷公園の南端に位置し、昨年9月に竣工いたしました。

当館の特色は、名実ともに版画を中心にした美術館ということにあります。版画作品は国際的にも高い芸術性と美術的価値が認識され、その位置は重要な部分を占めています。我国においても浮世絵をはじめとして、広く親しまれている芸術の一つといえます。

そこで、内外の優れた版画作品について調査・研究収集・展示を行い国際的文化交流の場として自由にい

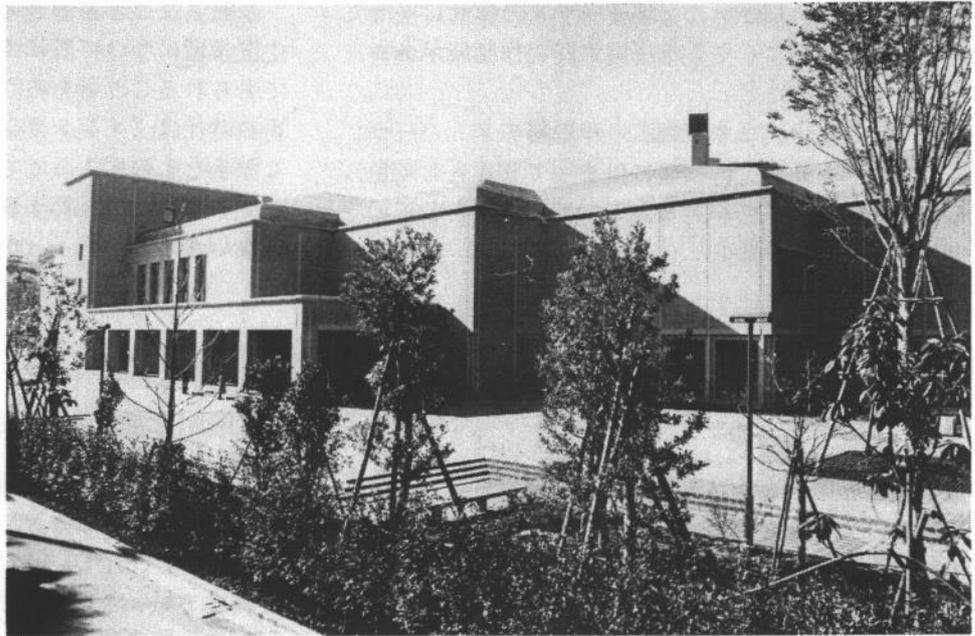
つでも利用でき、鑑賞・創作・発表を通じ美術に親しめる施設、あるいは町田市の文化の中核として活動していきたいと考えています。

本年4月の開館記念展では、「名作に見る日本版画」と題してその源流から錦絵が登場してくるまでを展望できるような展覧会を開催いたしました。

さらに、各版種のプレス機や、腐蝕室、写真製版室を備え、手軽なものから本格的な制作が行える版画工房を設置し、各版種の実技講座、講演会等を含め教育普及も活動の柱のひとつです。

建物につきましては、地下1階地上3階の鉄筋コン

クリート造、外壁にれんがブロックを使い環境との調和を図ったもので、延床面積約7840㎡ 館長室、事務室、学芸室等の管理棟、市民へのオープン・スペースとして講堂、市民展示室、工房、喫茶室等が1階にあり、2階部分は常設展示室(2290㎡) 企画室1(682㎡) 企画室2(292㎡)が配され、展示により企画室1と2、あるいは常設展示室まで互いの空間をつなぎスペースを変えることができます。その他、収蔵庫、整理室、写真室等が配置してあります。



作品収集におきましては、

日本を中心とした、東洋及び西洋の古版画より、現代に至るまで各時代の版画作品につつまして、6年程前より収集活動に入っており総点数は7500点を越えています。

館はこの4月にみなさまの御協力をいただき、開館をむかえることができましたが、将来にもわたり御指導、御助言下さいますようお願いいたします。

生涯教育と博物館

東京農工大学工学部附属繊維博物館前館長 金子六郎

最近の日本社会の最も大きな変化の一つは医療の進歩による高齢化である。昔から人類の最大の夢であった長寿の世が今や到来しつつあるようにも見える。しかし世界一の長寿国となった我が国が、はたして幸福いっぱいの楽園になったのであろうか。老人のぼけや自殺など新しい問題が次々起こっており、決して長寿と幸福は直結していないようである。象や亀は大変長生きするそうであるが、人間が象や亀のように長生きしても仕方が無い、人間は人間らしく生きるのなければ何のための長寿なのだろうか。

いまや「人間らしい高齢者の暮らし」を支える「生き甲斐」を私達一人一人が考えていかねばならぬ世の中になってきている。私達は博物館人としてその「生き甲斐」を生涯学習のなかに見いださうものと信じ、この信念を活動の原動力としている。そして博物館こそ、この生涯学習の場として最もふさわしい施設であると確信している。

現在の学校教育における学習方式は、教室の固定の席で、一定時間、画一的な講義を聞かせるがこれは十才・二十才代迄の生徒・学生には通用しても、高齢者には精神的にも、肉体的にも到底耐えきれぬものでなく、不適當な方式であること論をまたない。ところが博物館・郷土資料館等においては、高齢の利用者が自分で

興味あるテーマを選び出し、これについて自主的に、あるいは学芸員の指導を求めながら自分にあったペースで学習を続けることができる。そしてこのための博物館内の学習室・資料・文献等は無料または極めて低廉な費用で利用できる。一つの例として当館で実施しているサークル活動の実態を簡単に報告しご参考に供したい。現在、手織り・手紡ぎ・ボビンレース・結び・つる籠・藍染め・和紙貼り絵・型染め・組ひも・パッチワークなど十サークルがある。民間のカルチャーセンター等との違いは、単に手芸ばかりを習う場でなくその歴史・やさしい理論の勉強・関連の工場の見学等を行い、手先きと頭脳をあわせ鍛えることを目的としていることである。さらに各サークルは一般の参加者を対象にして、それぞれ年一回の講習会を企画・開催することにして、この催しには多くのメリットがある、即ちサークル内の団結・他人に教えるための自己の技量の向上錬磨・受講者から感謝されておこる「やり甲斐」等、始めに期待したよりもずっと大きなさまざまな成果をあげている。

また毎年二月には各サークルの合同作品展示会が開かれ、この展示会の見学者の中から新入希望の人が現れることになる。また各サークルは自主的にそれぞれユニークな運営をしており、館側では大綱はしっかり

押さえているが、細かいことはサークルの運営に任せられている。このようにして今年は第六回の作品展示会を開く迄にこぎつけた。

二十代から八十代までの幅広い年齢層のメンバーが、雨風をものともせず博物館に集まって喜々として色々な学習をしているのを見ると、博物館人としての「生き甲斐」を感じる。

生意気なことを書き連ねてきたが、各館園の方々には生涯学習について既にさまざまな努力を積み重ねられておられることであろう。日本が迎えた新しい生涯学習の時代は「インテリジェントなんか」というような派手なものによってではなく、地道な努力を積み重ねている博物館・郷土資料館こそが支えて行くべきではないだろうか。（かねこ ろくろう / 工学部長）

実習生から学芸員へ—新米学芸員の1年—

調布市武者小路実篤記念館 学芸員 伊藤 陽子

最初に調布市武者小路実篤記念館の囑託学芸員に、と声をかけていただいたのは、61年1月半ばのことで学生時代最後の難関、卒業をかけた正念場となる、卒業論文口頭試問の、たしか5日前だったと思う。そのちょうど半年前に、調布市郷土博物館で博物館実習を受けたことが縁となったことだった。話をいただいたときには、本当のところかなり戸惑った。私の専門は歴史で、文学でも美術でも近現代史でもなかったからだ。

大学4年生の1月という時期は、普通大部分の学生は就職先がとくに決まっている。早い者なら研修が始まっている頃である。しかし、私はまだフリーだった。学芸員志望だった私は、東京都内と近隣の市町村に学芸員の募集がないか問い合わせ、実際いくつかの公務員試験を受けて、見事に不合格となっていたからである。けれど、高校時代からの夢をそうあっさり諦めたくはなく、また簡単に方向転換できるほど器用でもなかったから、1浪まではしてみよう、と考えていた。だから、この話は私にとって、(専門のことを別にすれば)願ってもないことだったのである。

1日考えて、翌日やらせていただきたいと返事をした。決まるまでに1ヶ月かかり、その間にいろいろな事情が生じて、何人かの人に御迷惑をおかけしたことを、申し訳なく思っている。

ともかく、そんな訳で実篤記念館に決まったのが2月のなかば過ぎで、すぐに3月からアルバイトで通うことになった。10月に開館したばかりで忙しい上、職員数が少なく、加えて春の特別展の準備で人手が必要だったからだ。急に学芸員見習い(?)をやることになって、私は内心とても不安で緊張していた。いくら実習を受け、博物館でアルバイトをしたことがあるとはいっても、それはそれだけのこと。実際実務的なことはほとんどやったことがないし、たいした訓練も受けていないことは、自分自身よく分っている。日本の大学の学芸員課程が、(多少の差はあっても)頼りないものであることは、今更いうまでもない。事前に研修もなく、いきなり仕事に入るのは、本当に心細かった。実篤記念館に入ってみて感じたのは、その忙しさだ

だった。もちろん、博物館は大抵どこでもとても忙しい。まして開館したばかりで、まだ整備されていないことが多いから、忙しいのは不思議はないのだけれど、何と言っても、年に特別展2回テーマ展8回の、合計10回という展示替えの多さは驚きだった。このハードなスケジュールは、限られたスペースを有効に使って、より多くの資料を紹介するためのもので、それによって1人の人に何度でも来てもらえる工夫である。実際やっていて、感想ノートやアンケートを見ると、繰り返し訪れる人が増えている。調布市内や周辺の区市町村からだけでなく、北は北海道から南は沖縄まで、幼児から老人まで、巾広い層に定着しつつあるようだ。そういうことを感じると、やりがいがあるけれど、やはりひどく忙しい。

だから、半人前だなどとは言っていられなかった。一番最初にやった仕事は、ネームプレート用のハレバネを切ることだった。それから1年の間に、本当に色々なことをやったと思う。勤めだして間もなく、まだ館の成り立ちもよく覚えていない頃に、団体を案内することになり、あがってしどろもどろで大汗をかいたこともあった。資料を扱うのが初めはこわくてしよがなかつたし、印刷物や演示具の原稿はいつもギリギリになる。資料収集で古書店街を歩いたり、関係者と話したりする時は、内心ひどく緊張していた。

そんな風だったから、この1年間私は常に「早く、「一人前」になりたい」と思いつづけてきた。意地ばかり一人前であとはすべて半人前だから、実篤記念館や郷土博物館のスタッフの手をずいぶんわずらわせたと思う。それでも暖かく指導し、フォローしていただき、本当に感謝している。

実篤記念館では、年度内に館報を発行する。その創刊号の編集を、私がやらせていただくことになった。印刷物の編集は初めてで、また緊張しているけれど、他のスタッフに支えてもらいながら、目下レイアウト用紙と格闘している。開館から1年余分の報告となる館報を編集しながら、自分がこの1年で何を学んだか、何ができたかを、もう一度見直してみたい。どれだけ「一人前」に近付けたか、考えてみたい。

〔昭和61年度展示活動報告〕

| 館名 | 展示会名 | 期間 | 内容 |
|------------|-------------------|----------------------|---|
| 五日市町郷土館 | カメラがみた終戦直後の五日市 | 61.2月 ～61.6.30 | ミュージアム多摩前号掲載ずみ、他は常設展示、講座調査活動 |
| 青梅市郷土博物館 | 青梅のあけぼの展 | 61.2.1～ 継続中 | 市内遺跡の発掘によって出土した、旧石器時代から奈良・平安時代にかけての遺物を順次紹介していく |
| | 農具展 | 62.2.20 ～9.15 | 農耕機械の発達によって、徐々に姿を消しつつある、昔ながらの農具の展示・紹介をする |
| | 収蔵品展 | 常設展 | 開館以来、市民の方々から寄贈をうけた民具をはじめとする収蔵品を展示・紹介する。(特集コーナーでは、竹の道具展を開催) |
| 奥多摩郷土資料館 | 奥多摩の中世史展 (1階) | 61.3.1 ～5.19 | 奥多摩中世史の内、戦国時代、小河内衆の頭梁杉田氏を中心として、それに関わりのある文化財の出陳 |
| | 収蔵品展(2階) | 常設展 1.13～18 | 小河内の山村生活用具(国指定)を中心に展示 小展示替:小正月のまゆ玉飾り |
| 清瀬市郷土博物館 | 絹を生み出す展 | 61.8.1 ～63.2.21 | (民俗展示室)昭和初期まで清瀬で行われていた養蚕と、機織り関係の民具を、その流れにそって展示 |
| | 清瀬で使われた庶民の焼物展 | 61.11.1 ～62.11.10 | (歴史展示室)下宿内山遺跡出土の陶磁器類を展示し、その焼かれた窯や産地からの輸送経路を解説 |
| | 中里の地引絵図展 | 61.3.29 ～6.29 | (歴史展示室)明治時代の中里の地引絵図を、現在の地図と比較展示 |
| | 円福寺涅槃絵展 | 61.7.1 ～11.12 | (歴史展示室)江戸時代前期に草創されたと伝えられる曹洞宗円福寺の涅槃絵を展示 |
| | 下宿囃子展 | 61.11.13 ～12.26 | (歴史展示室)市指定無形民俗文化財の下宿囃子諸道具を展示 |
| | 峯尾大休展 | 62.1.6 ～3.31 | (歴史展示室)多摩に生まれた名僧、平林寺二十一世峯尾大休の書画を展示 |
| | 清瀬の365日展 | 61.4.27 ～5.11 | (ギャラリー)清瀬市在住の写真家熊谷元一氏が、一年間にわたり清瀬を毎日撮り続けた写真展 |
| | 浮世絵で見る養蚕の流れ展 | 61.8.1 ～8.14 | (ギャラリー)喜多川歌麿・溪斎英泉などの作品にみられる養蚕風景を描いた浮世絵の展示 |
| | 棟方志功「東海道棟方板画」展 | 61.9.23 ～10.12 | (ギャラリー)東海道を描いた棟方板画全62点の展示。 |
| | 第2回清瀬美術家展 | 61.11.8 ～11.24 | (ギャラリー)市内在住の美術家による作品展 |
| | 日中友好中国書法家協会書道展 | 62.2.8 ～2.15 | (ギャラリー)中国書法家協会による書道展 |
| 立川市歴史民俗資料館 | 今昔写真展Ⅰ「立川駅の移り変わり」 | 61.8.5 ～8.17 | ※他に歴史映画シリーズ・伝承事業・宿泊体験学習 甲武鉄道開通から、駅ビル建設までの立川駅の移り変わりを、写真および絵画で展示(約30点) |
| | 今昔写真展Ⅱ「立川駅周辺の今昔」 | 61.8.19 ～8.31 | 明治時代から昭和55年頃までの立川駅北口や南口の移り変わりを、写真および絵画で展示(約30点) |
| | 「写真にみる立川の近現代史」 | 61.11.5 ～11.24 | 立川市の近現代のあゆみを、立川駅、飛行場、街並み、学校等のテーマ別に写真で展示(約60点) |
| | 今昔写真展Ⅲ「立川飛行場のあゆみ」 | 61.11.25 ～62.2.22 | 立川飛行場のあゆみを、大正11年から昭和59年までの写真で展示(約30点) |
| | アボ・ヘボ展示 | 62.1.9 ～1.26 | 小正月の年中行事として行なわれるアボヘボを庭に展示 |
| | マユダマ展示 | 62.1.24 ～1.26 | 小正月の年中行事として行なわれるマユダマを玄関ホールに展示 |

| | | | | |
|--------------|----------------------------------|-------------------------------------|--|--|
| 調布市郷土博物館 | 「郷土の写真家石川俊雄氏遺作写真展」 | 62.2.24 ～4.5. | 前文化財保護審議会委員であった石川俊雄氏が、50年にわたり撮影した写真のうち、立川の風景や多摩川など約60点を展示。 | |
| | 常設展 「調布の歴史」 | 61.4.1～7.6 | 調布の原始・古代から近代までの歩みをたどり、また多摩川関係の資料、庶民のくらしの道具などを展示し、郷土に生きた人々のくらしの様子を紹介。 | |
| | テーマ展 「多摩川～流れとくらし～」 | 61.7.16～9.14 | 多摩の関連調査によって得た資料を展示し、人々の生活と多摩川のかかわりを紹介 | |
| | 特別展 「日本映画アンコール」 | 61.10.1～12.1 | かつて庶民の娯楽の中で大きな位置を占めていた映画についてとりあげ、「東洋のハリウッド」とも呼ばれた映画の町調布の往時の姿を紹介 | |
| | 常設展 「調布の歴史」 | 61.12.19 ～62.3.1 | 調布の歴史・民俗を、出土遺物、模型、写真等で構成展示 | |
| 調布市武者小路実篤記念館 | 「実篤の足跡」展 | 61.3.14 ～61.4.20 | 没後10年を迎えた実篤を偲び、晩年の作品や文化勲章などを展示 | |
| | 〈春の特別展〉 「友情」 | 61.4.26 ～61.6.1 | 近代文学の中で最高の典型とされている実篤と直哉の友情の姿を、直哉が実篤に捧げた「暗夜行路」の草稿や、日記、書簡・愛蔵品・書画などで構成 | |
| | —志賀直哉と実篤— 「書」展—実篤作品とコレクション— | 61.6.7 ～61.7.13 | 実篤作品とコレクションの中から、書を中心に展示 | |
| | 〈夏休み特別企画〉 「人間萬歳」 | 61.7.18 ～61.8.31 | 文学、美術など、幅広い分野で一貫して“人間愛”を語り続けてきた武者小路実篤の生涯を、小・中・高校生にもわかりやすい解説を加えて紹介 | |
| | —実篤の生涯— 〈秋季展〉 「自然は不思議」 | 61.9.5 ～61.10.19 | 菊・柿など秋にちなんだ題材の作品、愛蔵品を中心に展示 | |
| | 〈開館1周年記念特別展〉「美に向かつて」—実篤の愛した美の世界— | 61.10.25 ～61.11.24 | 実篤が“見て・書いて・描いた”美術活動を、愛蔵品、原稿、著作等によって構成した展示 | |
| | 「西洋美術小品展」 | 61.11.29 ～61.12.25 | 実篤コレクションのうち西洋美術の小品を、館蔵並びに都美術館所蔵品の中から選りすぐって展示 | |
| | 「新収蔵品展」 | 62.1.6 ～62.2.1 | 昭和61年度に新たに収蔵した実篤の書画、原稿、著作を紹介 | |
| | 「我が家の実篤作品展」PART・I | 62.2.6 ～62.3.8 | 実篤の書画は独特の作風で親しまれてきた。調布市周辺で実篤作品を所蔵される方の協力を得て、ふだん見る機会のない作品を展示 | |
| | 〈春季展〉 「共に咲く喜び」 | 62.3.13 ～62.4.19 | 草花などをテーマに、春にちなんだ作品を展示 | |
| | 東京農工大学工学部 附属繊維博物館 | 特別展 東京農工大学先端 科学技術展 | 61.6.19～6.22 | 大学の産業界の新しい連携として大学の研究成果を企業の研究、開発者や地域住民に公開し、産・学・地域・学の触れ合いの場を創る目的のユニークな展示会でバイオテクノロジー、新素材、新デバイス、新ソフト科学など各分野にわたり91件のバラエティに富んだ展示会であった。 |
| | | 特別展 繊維博物館創立百 年記念寄贈コレク ション展 | 61.11.8～ ～11.16 | 創設百年を記念して当館所蔵の全コレクションを一堂に集めて公開展示、所蔵品は7コレクションで江戸時代の浮世絵から現代の珍しい織物見本までを展示 |
| | | ミニ展 和紙の花展 | 61.2.12～3.3 | 海部桃代女の和紙で作った「ばらの花」など30点 |

| | | | |
|--------------|-----------------------------------|--|---|
| 東京都高尾自然科学博物館 | お蚕のお札展 | 61.3.17~5.20 | 鈴木コレクション公開 約30点 |
| | 珍しいせんいⅠ | 61.5.23~6.17 | 天然の繊維「植物の繊維」約30点 |
| | 紬瑠かご二人展 | 61.6.19~6.22 | 丸山、田代氏による紬瑠かご作品 約20点 |
| | 珍しいせんいⅡ | 61.6.25~7.30 | 化学系の繊維「水に溶ける繊維」など約20点 |
| | マッチとタバコの商標展 | 61.9.3~10.1 | 松村コレクション公開 約500点 |
| | テキスタイルデザイン展 | 61.10.3~10.24 | 大塚学院学生によるコンペ作品106点 |
| | わら細工展 | 61.11.1~11.29 | 齊藤晃輪氏のわらぞうりなどの作品60点 |
| | ミニコレクション展 | 61.12.1~2.16 | 寄贈コレクションの7コレクションの中から珍しい所蔵品を選んで展示 |
| | 友の会サークル作品展 | 62.2.18~2.24 | 繊維博物館に芽生えた生涯学習グループ「サークル」の一年間の活動成果をまとめた作品展。 |
| | ジオラマ展示「鳥たちの森 — 初夏の高尾山」 | 61.12.5~ 常設展示 | 高尾山の森で初夏に見られる野鳥の生態を、ジオラマにより展示。イヌブナ林を再現し、ヒナに餌を運ぶオオルリ、シジウカラの親子、飛ぶブッポウソウなどをバードカービングによって展示した。 |
| 東京都武蔵野郷土館 | 企画展「教科書」 | 62.3.3 ~3.29 | 明治時代から戦後にかけて、収蔵収品を中心に約100点の教科書を展示し、近代教育の歩みの一端を採る。 |
| 八王子市郷土資料館 | 多摩における暦の世界 | 61.7.8~8.17 | まず暦の歴史を概観するため具注暦・地方暦などを紹介した。次に伊勢御師や明治年間の改暦をとりあげ、多摩地域での暦と暮らしとのかかわりを考えてみた。さらに民間暦と自然暦を紹介した。 |
| | 八王子の歴史と文化 | 61.10.1~12.21 | 市制70周年・開館20周年を記念し、古代においては新しく発掘された出土品を多数加え、また、近世以降ではこれまで収集した資料を、さらに体系化して展示した。 |
| 羽村町郷土博物館 | 人物コーナー 「塩野適斎」 | 62.2.17~3.29 | 千人同心で、『新編武蔵風土記稿』の編さんに加わったり、『桑都日記』の著者でもある塩野適斎を紹介した。 |
| | 企画展 五月人形飾り 特別展 『大菩薩峠』さし絵 | 61.4.27 ~5.11 61.5.10 ~6.22 | 収蔵品を中心として、幕末より昭和に至る幟・座敷幟・吹流し・武蔵人形等60点を展示。 |
| | 蚕の飼育 | 61.5.17 ~6.9 | 小説『大菩薩峠』の中にあるさし絵は、横山大観、小林古徑・伊東深水など著名な画家たちによって描かれており、それら画家たちのさし絵の原画を中心としながら介山と石井鶴三とのさし絵論争から、介山の思想を採る。 |
| | 企画展 羽村の野鳥展 特別展 養蚕展 | 61.8.10 ~10.26 61.9.13 ~10.12 | 昔、盛んだった養蚕をしのぶため、実際に蚕を飼育し、展示した。 寄贈された鳥の剥製を展示し、自然に対し理解をふかめる。 |
| 東村山市立郷土館 | 企画展 まゆ玉飾り展 | 62.1.10 ~1.18 | 昔羽村の人々の生活と関係の深い養蚕を取上げ、実際にサシダンを組んで納2千頭の蚕を飼い、桑こく桑くれ、しりぬきなど蚕の成長にあわせた体験作業や掃立から上簇まで順を追って展示した。また古文書・明治初期の養蚕資料・成造社関係も展示した。 |
| | 企画展 雛人形展 | 62.3.1 ~3.29 | 昔からのだんご作りから飾りつけ、またその歴史などを学んだ。旧下田家と展示室内に展示。 |
| | 郷土を知る板碑展 | 61.3.18~23 | 三月の年中行事である雛人形かざりを収蔵品・借用品あわせて展示した。 |
| | | | 拓本と実物で見る。 中世（鎌倉一戦国時代）約400年にわたる。特有の石造文化財を拓本（掛軸）や写真及び実物で展示し公開を図った。さらに拓本実技指導も同時に行ない技術の羽得に努めた。 |
| | | | パンフレットは内容として 1 板碑の理解のために 2 市内出土、伝存の板碑 |

| | | | |
|---------------|---------------------------|-----------------------|--|
| 府中市立郷土館 | 農業のくらし展 | 61.4~ | 3展示目録 を解説した。 当地は古く農業を中心に発展した町で、生業の中で欠かすことのできない道具類を所狭しと展示、土と汗とで生活した農道具、民具、儀礼用具等を陳列し、何時でも直接目にふれ、わかりやすく説明も加えてある。 文化団体愛刀会主催の刀剣武具等の展示。 |
| | 市民芸術文化祭参加「刀剣展」 | 61.11.1~11.6 | |
| 福生市郷土資料室 | 生物写真展「ファインダーを通して見た生物の世界」Ⅰ | 61.6.1 ~6.29 | 写真を通じて自然に親しむことを目的に、写真家宮城六郎氏が撮影した植物、昆虫の接写写真30点を展示。 |
| | 福生市のシダ展 | 61.8.1 ~10.30 | シダ植物の形態、生活の中で使われるシダ、生活環境と分布等について解説し、市内に自生する38種の実物標本を展示。 |
| 町田市立博物館 | 生物写真展「ファインダーを通して見た生物の世界」Ⅱ | 61.11.1 ~11.30 | 当資料室の講座「生物写真講座」に参加した16名の作品40点を展示。 |
| | 小正月のモノツクリ | 61.11.1 ~1.30 | 福生市周辺特に多摩川上・中流に伝わる小正月のモノツクリ儀礼に関わる民俗資料の展示。 |
| | 大田南畝—福生ゆかりの江戸文人— | 62.2.1 ~3.29 | 文化5年、多摩川治水巡視の折に福生市域を訪れた大田南畝（蜀山人）の墨蹟を展示。 |
| | 福生の成り立ちと人びとの歩み（常設展） | 61.4.1 ~3.31 | 福生市及び周辺地域の理解に必要な自然、歴史、民俗資料を展示。 |
| | 町田の縄文展 | 4.15~7.6 | 最近発掘された資料を中心に、縄文時代の土器・石器などを通して、町田の原始時代をさぐる。 |
| | 和鏡 | 7.15~9.15 | 平安~江戸時代までの系統的な和鏡の収集家として著名な、池谷健治氏のコレクションを公開。 |
| | 明治の新聞展 | 9.23~10.19 | 59年に開催した『かわらばん展』につづき、明治の新聞を取上げ、日本の報道の初期変遷を追ってみる。同時に消滅して行く、明治の瓦版の姿をたどる。 |
| | 一同時展示明治の瓦版— | | |
| | 多摩の三匹獅子舞 | 10.28~11.23 | 三匹獅子舞は、関東地方に多くみられる民俗芸能で、多摩地域でも80ヶ所あまりと伝えられている。町田の3ヶ所と多摩地域を中心に紹介。 |
| | 動植物の方言と伝承 | 12.9~1.25 | 町田市内につたわる、動植物の方言と伝承について、市民の方が調査を行いその成果を展示。同時に昭和30年代までの衣食住、生産生業の民具を紹介。 |
| 瑞穂町郷土資料館 | 一同時展示民具と生活— | | |
| | 漆絵 密陀絵 | 2.24~3.22 | 桃山・江戸時代を中心に日常用いられた漆工品の中から、漆絵・密陀絵によって飾られた優品を集め多彩な展開の姿を概観しようとするものです。 |
| 武蔵村山市立歴史民俗資料館 | 養蚕展 | 61.11.1 ~62.10.30 | 瑞穂町における養蚕関係用具等を展示紹介(45点) 61年11月より62年1月末日までは東京都養蚕指導所の関係パネル10枚を展示した。 |
| | 常設展「武蔵村山その自然・その歴史・その民俗」 | 61.4.1 ~62.3.31 | 武蔵村山市の自然、歴史、民俗についてその概要を展示し、来館者のより深い学習の契機となるよう努めている。 |
| | 市指定文化財「真福寺格天井花鳥画」特別展示 | 61.7.20 ~61.9.21 | ビデオコーナーでは新たに「武蔵村山市の手工芸」、「武蔵村山市の伝統的産業」、「武蔵村山市の街道」を追加し、公開した。 |
| | 写真展「武蔵村山の今と昔」 | 61.11.16 ~61.12.14 | 市の指定文化財である「真福寺格天井花鳥画」の実物(5枚)、複製画(4枚)、写真(25枚)を展示し、近世の貴重な文化財の紹介を通して文化財保護意識の高揚に努めた。 |
| | | | 資料館で収蔵している写真資料の内から「武蔵村山の今と昔」と題し、写真展を実施した。 内容は本市と関りの深い村山・山口両貯水池建設時の写真を中心としたものであった |